



阿刀田 高
(作家)

アーサー・ビナード
(詩人)

対
談

古典にみる日本語の魅力

古典を題材とした作品を数多く手がけられている阿刀田高さんと、日本語を自在に操り、多くの詩やエッセイを書かれているアーサー・ビナードさん。日本語に造詣が深いお二人に、古典にみる日本語の魅力や、子どもたちに古典を教えることについて、語り合っていました。

日本語は 古典に親しみやすい言語

ビナード 「古典」というと、ぼくはマーク・トウェイン(※1)の古典の定義「古典とは、誰もが褒めたたえ、誰も読まない作品のこと」という言葉を思い出すんです(笑)。

阿刀田 あはは。おもしろいですね。

ビナード 英語で「The Classics (古典)」というと、古代ギリシャとローマの古典を指します。ホメロス(※2)とかね。だから、英米人にとって、古典の原話は敷居が高いんです。

阿刀田 そう考えると、日本人は古典に親しみやすい言語をもっているといえますよね。『源氏物語』は千年前の文学ですけど、「いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらい給ひけるなかに…」という文章は、今の私たちが聞いても、ある程度の雰囲気をつかむことができます。千年前の言語を現代人が聞いてもわかるというのは、日本語以外にあまりないんじゃないでしょうか。ビナード フランス語やイタリア語、もちろん英語も千年前には成立していないです。

阿刀田 ですから、日本人はもともと古典に親しんでほしいと思うんです。

特集

日本の心、日本の言葉

千年以上の歴史をもつ日本語。

その長い歴史のなかで育まれた伝統的な言語文化を

子どもたちが学び親しむことが、今求められています。

本特集では、古典にみられる日本語の魅力や、

新しい教科書にどのような教材が取り上げられるかをご紹介します。

※1 マーク・トウェイン (Mark Twain)
アメリカの小説家。1835～1910年。主な作品に『トム・ソーヤの冒険』『ハuckleberry・フィンの冒険』など。対談中の言葉の原文は、「Classic': A book which people praise and don't read."」

※2 ホメロス
古代ギリシャの詩人。前9世紀頃に生まれ、吟遊詩人として、ギリシャ諸国を遍歴したといわれている。

「をかし」という言葉一つとっても、 面白い変遷があるのです。

阿刀田



あとうだ たかし
阿刀田 高

作家。1935年東京都生まれ。早稲田大学仏文科卒業。国立国会図書館に司書として勤務する一方で、執筆活動続け、1978年『冷蔵庫より愛をこめて』でデビュー、1979年『来訪者』で日本推理作家協会賞、短編集『ナポレオン狂』で直木賞、1995年『新トロイア物語』で吉川英治文学賞を受賞。現在、日本ペンクラブ会長。

ビナード 古典を学ぶことで、ものの見方が変わっていきます。その「古典レンズ」を通して世界を見れば、今まで気づかなかったことが浮かび上がってくる。

阿刀田 「古典の知識が何の役に立つのだ」と言う人もいますが、実質的に役に立つのとはまったく別の、深い意味があると思いますね。

古典を学ぶ意義

ビナード 日本語には、英語にない表現がたくさんあって、それが古典になるとさらに豊かです。来日して二十年ほどになりましたが、日本語を学び始めたころに、いろいろな場面で、英語にはない「感覚の振り分け」が必要になると感じました。

阿刀田 それはどういうことですか。

阿刀田 本来「趣がある」という意味だった言葉が、時代の変遷のなかで、なぜ「おもしろおかしい」という意味になったのか。おそらく、趣のあることを表現しようとする、ちょっと受けを狙わないといけなくなったんだと思うのです。松尾芭蕉が、そのあたりで悩んだと思うのですが。

ビナード そうですね。俳諧を経て、コメディの方へ傾いていったような気がします。阿刀田 そこに、日本人のものの見方が反映されているわけで、そこまで踏み入っていくと本当にももしろいし、日本文化の奥深さを感じることができる。それは古典を学ばないとわからないことです。

ビナード 日本語の歴史は脈々と流れていますから、現代と古典とを分けることが、そもそもナンセンスなのかもしれないですね。はつきりとした境界線はないんですから。

現代と古典とを分けることが、
ナンセンスなのかもしれないですね。

ビナード



アーサー・ビナード

詩人。1967年米国ミシガン州生まれ。2001年に詩集『釣り上げて』（思潮社）で中原中也賞、2005年に『日本語ばこりばこり』（小学館）で講談社エッセイ賞、2007年には『ここが家だ——ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）で日本絵本賞を受賞。近著に、詩集『ゴミの日』（理論社）など多数。

を対比すると、そこにもやはり違いがあるんです。けれど、その違い方は英語と日本語の違いとは、別種のもんです。

ビナード そうですね。現代語と古典語にはもっと継続性がありますから。

阿刀田 継続性をもちながら、違いがあることの意味を考えると、そこには日本文化の変遷があると思うんです。私はそのことを説明するのによく「をかし」という言葉を使うのですが。

ビナード 『枕草子』ですね。

阿刀田 清少納言の言う「をかし」は、「趣がある」という意味です。しかし、今の私たちが使う「おかしい」は「をかし」から出た言葉ですが、「笑える」とか、「おもしろおかしい」という意味で使うことが多いです。

ビナード 「変だ」「怪しい」という意味で使うこともありますね。

ビナード 授業の限られた時間の中で、説明してもあまり御利益ないでしょうし…。

阿刀田 ですから事前に、コラムのそういう部分を削って置いて、外国人に読ませるんです。でも、上級者の外国人はプライドを傷つけられるようで、怒るんです（笑）。ビナード ぼくでも怒るでしょうね（笑）。

阿刀田 つまり、新聞のようなふだん私たちが読んでいる文章のなかにも、ずいぶん言語の歴史的背景が含まれている。それを知らない、現代文をきちんと理解することはできないんです。日本語を使いこなせる外国人が、コラムを読めなかったように。ビナード 今の日本語だけを見ても、現代の文章を理解するには足りない。現代社会と歴史と、同じ関係ですね。



四季折々の豊かな言葉

ビナード 新しい教科書には、さまざまな古典や季節の言葉が紹介されるそうです。阿刀田さんが好きな季節の言葉は何ですか。阿刀田 雨の言葉が好きですね。「五月雨」〔時雨〕「菜種梅雨」〔※3〕「卯の花腐し」〔※4〕。日本は雨が多い国で、四季と絡めた雨の言葉がたくさんあります。四季とは関係ないけれど、「遣らずの雨」〔※5〕という言葉もいいですね。ちよつと色気が出ずぎるかもしれませんが。

ビナード 小学生にはね（笑）。ぼくは時間帯と動植物をつなげた言葉がおもしろくいた言葉ですが、いつしか季語になっていった。地域限定で使われていた言葉が季語になることもあります。きつといくつかの秀句が出たでしょう。

ビナード 「やませ」〔※9〕もそうですね。しかし、最近は異常気象で歳時記の季節の流れと合わなくなってきました。

阿刀田 そうなると、古典文学とのつながりが薄れてしまう可能性がありますね。ビナード 経済が成長する一方で、気候がおかしくなり、田園風景もなくなりつつある。古典を教えるのに困難な時代になってきていることは事実です。

阿刀田 日本語がどうしてここまで豊かになってきたのか考えると、この国は資源が少なく基本的に貧しい国だったからだと思うのです。貧しいなかで心を豊かにしていくために、言葉を大切にし、さまざまな言葉を使うようになったと思います。経済が発展し、その状況は変わりつつありますけれど。

「五月雨」、「時雨」、「菜種梅雨」…

いい言葉だと思いませんか。

阿刀田

て、たとえば、「夜桜」。桜の花と時間帯とあわせて一語にしているのが、実に風流です。「夜桜」のいい句があると英訳したいのですが「cherry blossoms at night」となってしまう。言葉がほぐされてしまい、何か違うんですね。

阿刀田 夜桜で思い出しましたが、日本には月を表す言葉もたくさんありますね。〔弓張月〕〔※6〕なんていいと思いますか。〔細い月〕では、実に味気ないでしょう。そういう言葉を知ること、物を見る目が豊かになると思います。

季節の言葉ではないけれど、私は「たそがれ」という言葉がとても好きなんですよ。〔誰そ彼〕〔つまり「Who is he?」〕。

ビナード she ではダメですか（笑）。

阿刀田 昔の女性は、遅い時間に外出できませんから、男性でしようね（笑）。同じような言葉に「朝まだき」〔※7〕があります。慣用句が状況を表す言葉になっていて、それも日本語の豊かさだと思っています。ビナード その豊かさを考えるとき、ぼく

は歳時記が大きな財産になっていると思います。多くの人々が感覚的に共有できる季節の言葉が「季語」として認められ、歳時記によって体系づけられて残っていく。歳時記はただの教養ではなく、感覚的に尖ったものではないでしょうか。

阿刀田 そうですね。季語のない俳句もありますが、私はやはり季語が入った俳句が好きです。俳句という芸術に季語を置くことによって、日本人の季節感がさらに鮮明になりますから。

ビナード 歳時記を見ると、日常生活では使わなくなった言葉が季語として生き残っています。たとえば「ひこばえ」という春の季語があります。木の根っこなどから生えてくる若芽のことなのですが、ふだんあまり使わない言葉です。でも、歳時記には載っていて、ときどき誰かが「ひこばえ」を入れたいい句をひねるので、言葉として命を保ち続けている。

阿刀田 おもしろいですね、季語というのは。「リラ冷え」〔※8〕は北海道で使って

古典の授業に遊び心を

阿刀田 子どもたちに古典を教えるとしたら、アーサーさんはどんな授業をしてみたいと思われそうですか。

ビナード 子どもたちの生活とつながる授業がしたいですね。小学校で古典を生かすには、子どもたちの毎日とどう結びつけるかということが、いちばん大事なんじゃないでしょうか。たとえば、『枕草子』ならリストが中心だから、みんなで創作をしてみよう。

阿刀田 「にくきもの」〔※10〕なんて、いいかもしれない（笑）。

ビナード そういうランキングは、すぐに

「夜桜」、「夕桜」、「朝桜」、

どれもうまく英訳できないんですよ。

ビナード



※9 やませ（山背）
山を越えて吹く風。特に、夏に東北地方に吹く冷涼な北東の風。

※10 にくきもの
『枕草子』第25段。「にくきもの いそぐ事あるをりに、長言するまらうど」で始まる。「硯に髪の毛が入って擦られている状態」「何か聞こうと思うときに泣く乳飲み子」など、清少納言の視点による「にくらしいもの」が綴られている。

※3 菜種梅雨
3月下旬から4月にかけて、菜の花が盛りの頃に降り続く雨。
※4 卯の花腐し
陰暦の4月を卯の花月という。その頃に降り続く雨。卯の花を腐らせる意。五月雨の別称。
※5 遣らずの雨
人を帰さないかのように降ってくる雨。

※6 弓張月
弓の弦を張ったような形をしている月。
※7 朝まだき
「まだき」は未だの意。夜が明けきらない頃。早朝。
※8 リラ冷え
「リラ」はライラックの別名。北海道でライラックの花が咲く頃（初夏）に気候が冷え込むこと。

できそうですね（笑）。子どもはおもしろがって編み出すでしょう。でも、ただ嫌なものを挙げるだけではダメ。「清少納言は、自分ならではの面白い表現をしているんだよ」と教えながら、子どもといっしょに作っていく。

阿刀田 いいですね。

ビナード 「春はあけぼの」も創作したらおもしろいでしょうね。雪が二メートルも積もる津軽平野の子どもたちが作る「春はあけぼの」は、都で清少納言が書いたものとはきつと違ってくる。ただただ「覚えましょう」という授業でなく、ワークシヨツプ的な作業をしてみたいです。教える側も楽しみながら。

阿刀田 先生方がそういう遊び心をもってくださいさるといいですね。私は幼い子どもたちに、言葉遊びを教えたいです。だじやれ、数え歌、回文、しりとり、いろは歌。日本にはたくさん言葉遊びがありますから。

いえますね。

阿刀田 和歌や俳句は、レベルの高い言葉遊びでしょう。言葉遊びは古典とかかわりのあるものが多いのです。「だじやれ先生」と言われてもいいから、どんな子どもたちに言葉遊びを伝えて、言葉への興味をもたせたいですね。

ビナード やりすぎると、だじやれ先生が「にくきもの」のリストに挙げられる（笑）。

阿刀田 言葉遊びは古典に親しむ手始めになると思いますよ。私の家族は言葉遊びが好きで、幼い頃からよく教わりました。それと、今思えば、小学校高学年で「小倉百人一首」に出会ったことがよかったです。思っています。姉貴たちがよく百人一首で遊んでいたの、負けたくない一心ですべて覚えしました。意味はよくわからなくても、覚えることで何となく百人一首の世界に入っている感じがする。それから、あの調子を知っておくと、後に古典にふれるとき、心にすっと入ってくるのです。

古典の授業は、

先生方が愉快な心をもっていることが大事でしょうね。

阿刀田

古典と子どもの日常の接点を探りながら、
分け入ってほしいです。

ビナード

し、子どもたちも嫌いではないような気がします。

ビナード 新しい教科書には「寿限無（※11）」が載るそうですが、以前ある小学校に行ったら、五年生の子どもたちがぼつちり覚えているんです。下手すると嘸家（ふしか）の前座よりうまい。

和歌は歌うように、俳句はリズム感で、落語は間と語り口と笑いで。そうやって覚えていけるかもしれないですね。『枕草子』だったら、清少納言の人物像がつかめると、暗記しやすい気がします。覚えることで、そのテキストがもつ背景がおのずと見えてきます。

阿刀田 ええ。たとえば百人一首だと、自然のことを詠んでいるようで、実は自分の好きな相手のことを詠んでいることがあります。今の子どもたちは「はつきり言ってくれ」なんて思うのかもしれないが（笑）、「昔の日本人はこういうものの方したのか」と、当時の時代背景を知るきつ

かけになると思います。

大人も古典に親しむ

阿刀田 やはり古典の授業では、先生方がどこまで愉快なものを心にもっているかが大事でしょうね。

ビナード 本当にそう思います。新しい学習指導要領では、伝統的な言語文化が重視されていますが、子どもに「古典に親しみなさい」という前に、はたして大人が古典に親しんでいるのか、生活の中で活かそうとしているのか。そこが重要になると思います。

阿刀田 新しい教科書には、たくさん古典が載っていて、それ自体はよいことだと思っています。しかし、教科書がひとり頑張っているのはだめなんです。やはり先生方がそれをおもしろがって教えてくださらないと。

ビナード 古典を通して現代社会を見つめ

ビナード 百人一首は、歌うように暗記できそうですね。学校で「係り結びの法則」を勉強するのはイヤだけど、「音で覚えたあの歌も、けりぐじゃなくて、けるぐだつたな」と、実例が体内にしみこんでいると、強いですよ。

阿刀田 遊びとして頭に入っていることはすばらしいと思います。

ビナード たとえば、家族の誰かが謡（うたい）をやっているといいかもしれない。謡の文句も、古典を学ぶときに役に立ちますよ。

阿刀田 そのときに意味がわからなくてもいいんですね。後で、「これはこういうことだったんだ」とつながりますから。丸暗記というのは、そんなに悪いことではない



れば、「今」がより鮮やかに映し出されます。古典と子どもたちの日常との接点を探り、子どもといっしょに、楽しみながら分け入ってほしいですね。

阿刀田 日本語には千数百年の歴史があつて、古典はその原点といえます。

先ほど、「この時代だからこそ言葉のもつ力を取り戻したい」と申し上げました。今、言葉のもっている力を取り戻すためには、日本語の原点である古典を、大人も子どももしっかり見つけていくことが、大事なのではないのでしょうか。

※11 寿限無
古典落語の一つ。「寿限無寿限無…」で始まる長い名前によっておこる笑いを主題としたもの。

新版教科書で育てる 日本の心

はじめに——時間・未来・過去をめぐる問答

「わたしたち人間にとって、「時間」はつねに未来に向かう感覚として存在します。なぜなら、わたしたちが感じる「時間」とは、旅人が目的地に向かって歩き続けるような、ある方向性をもった動きであり、その方向は必ず未来を指すからです。

——過去は感覚としての「時間」に入らないのか。

——入りません。なぜなら、過去とは方向性をもった動きではなく、経験と知識の蓄積だからです。

——それで何が言いたいのだ。

——未来に向かうわたしたちの「生」は、後戻りすることのできない方向性を持っています。つまり、時間という動きにしばらくはいます。ですが、未来の「生」をどんな「生」

にするか、その手がかりや見通しは、過去という蓄積から、いつでもいくらでも取り出すことが可能だと言いたいのです。

——なんだ。そんなことなら、昔から「温故知新」というじゃないか。

——そうですね。ただ、その格言を引き合いにする行為こそ、過去を未来に生かそうとする営みだということに自覚的であつてほしいのです。わたしたちは、過去という蓄積からさまざまな知恵や技術を受け継いで未来に向かいます。そのとき、蓄積された事柄は時間というしりばりから解き放たれ、どの時代のもでも自在に手に入れることができるのです。これを生かさなない手はありません。

だという自信と誇りが、すべての子どもたちの胸にこみ上げてくる、その瞬間のために十冊の教科書は編まれています。

えてきそうです。古典を小学校国語科で扱う意義はどこにあるのか。この問いに明確に答えるには、工夫が要りそうです。

先ほどの会話から導かれる答えはこうです。

後戻りできない未来をよりよく生きるために、子どもたちの「生」を豊かにする必要があるから。

子どもたちの「生」を豊かにする知恵や技術のうち、長い間人々に受け継がれ、語り継がれてきたものには、未来を照らす価値、言い換えれば普遍的な価値があるはず。そこには、わたしたちの祖先から連綿と紡がれてきた「生きること」へのメッセージ、「日本の心」が織り込まれています。その「心」を、最も美しく磨き上げた状態で子どもたちに届ける作業は、未来をたくましく照らすための松明を手渡すことに他なりません。

こうした思いから、光村の新しい小学校国語教科書では、一年生から六年生まで〈伝統的な言語文化〉にふれる教材をちりばめました。それらはすべて、未来に向かう子どもたちの「生」とつながっています。六年間の学びを終えて中学校に向かうとき、こんなにもたくさんの過去を学んできた

光村教科書における〈伝統的な言語文化〉の世界

新しい教科書では、〈伝統的な言語文化〉として代表的な単元が三十一編もあります。教材総数はこの何倍にもなります。これらのねらいと魅力をすべて紹介するわけにはいきませんので、これから、筆者が特に興味をひかれる単元構成や教材に通し番号をつけ、紙幅の許す限りでその特徴と魅力、扱い方の工夫を、せっかくだから「文語調」で記してみようと思います。

願はくば、この紹介文をして全国の先生方を宣揚せしめん——。とこんな感じです。それでは……

「全体構成」……

光村の新小学校国語教科書の〈伝統的な言語文化〉に関する単元は主に二つの系統をなす。

第一は六年間一貫して学ぶ単元として、全学年に

藤森裕治

信州大学教育学部教授。長野県生まれ。東京都立高等学校教諭を経て、現職。教育学博士。専門は国語科教育学(授業研究)、日本民俗学。NHKラジオ高校講座講師。著書に『死と豊穡の民俗文化』(吉川弘文館)、『国語科授業研究の深層—予測不可能事象と授業システム—』(東洋館出版社)など。

〈伝統的な言語文化〉を学ぶ意義

冒頭からやや哲学的な会話を出したのは、〈伝統的な言語文化〉を小学校で扱うことの意義を示すためです。〈伝統的な言語文化〉を端的に言えば「古典」です。読者の皆さんは「古典」と聞くと、どのようなイメージを抱くでしょうか。読みづらい、古くさい、文法で苦しんだ。そんな声が聞こ

「聞いて楽しもう」
「声に出して読もう」
「季節の言葉(二年より)」
「学習を広げる」
を配す。これらは四季の巡り来るごとく繰り返し学ぶことにより、子どもたちの情操を育成するものなり。

第二は、学期中の独立単元として、各学年に

「むかしばなしがいっぱい(二年)」
「かるたについて知ろう(三年)」
「『ことわざブック』を作ろう(四年)」
「伝統文化を楽しもう(六年)」
「ものの見方を広げよう(六年)」
などを配す。これらは昔話、かるた、ことわざ、狂言、落語、絵巻を取り上げつつ、声、絵と共に受け継がれし言語文化に親しむ態度を育てるものなり。



【季節の言葉と年中行事】……………

『季節の言葉』には「花見、菖蒲湯、茶摘み、田植え、七夕、夏祭り、盆、月見、稲刈り、大掃除、除夜、節分」など、伝統的な年中行事が集まれている。これらは、時季に応じて話題にし、関連する俳句、唱歌などを紹介すべし。六年間の繰り返しにより、子どもたちは、季節の巡るがごとき時間の流れを実感す。哲学者の内山節氏（なむ）が『里』という思想』（新潮社）に曰く、「古き日本の農村では、時間が季節とともに循環し、一年たてば元の時に戻ると言ふ感覚を持ちて暮らしたる」と。地球温暖化の危機迫る今日、変化と発展を是とする時間を見直し、不易と安定に生きる時間を再評価することの意義は少なからず。

三 【神話や伝承】……………

一年「おはなしがいつぱい」は、折り込みの絵に日本と西洋に伝はる昔話の名場面をあまた描き込み、どこに何の話があるか捜しつつ、見つけし昔話を読み聞かす單元なり。読み聞きしていくつかの昔話の類似点などをみつけるも楽しきわざなり。例へば「花咲爺」、「さるかに合戦」、「ジャックと豆の木」には、いづれも植物のこゝろに生長するくだりあり。「竹取物語」もこの類なり。

【季節の花の名】……………

木々の早き生長を祈る行事は「成木責め^{なりき}」
として日本各地に今もあり。年の初めに果樹
の根元に斧をあて、「実多くならずか、な
らさねば伐るぞ」と唱へ、豊作を予祝する
ものなり。

二年の「季節の言葉」に取り上げられし四季の植物名は五十一種類に上る。春の七草もあり。国語学者の金田一春彦氏の生前に語りて曰く「米国の大学に留学せし某日本人学生、休日の体験を英文で随筆にせよとの課題に、公園に出て遊びしことを記して提出せり。後に教官に呼ばれ、『英語は正しけれど汝は知識をひけらかす憾みあり』と言はるるに合点がゆかず、何故かかと思ふか問ひ返すに、『文科系の学生ならば公園で見かけし花々は（赤や黄色の花の咲けり）と書くに、汝はいちいち植物名を記す』となむ言はれたる。日本語には植物の語彙多く、個体識別も異国の人々を驚かすほど繊細なることを知る逸話なり」と。季節の花々は異名も多く、また、子どもらの格好の遊び道具にもなる。これらを採集して俳句、短文などを添へれば、美しき單元となるべし。



折り込みの表面は日本の昔話、裏面は西洋の昔話の場面が描かれている。



「おはなしがいっぱい」
(一年下)

「季節の言葉　く春がいつはいつ」（二年上）

春が
いつ
ぱい



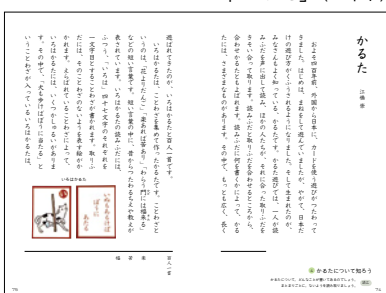
はなが さいた
まど・みちお

はなが さいた
はなが さいた
はひふへ ほほほ
はなが さいて
みない ひと いな

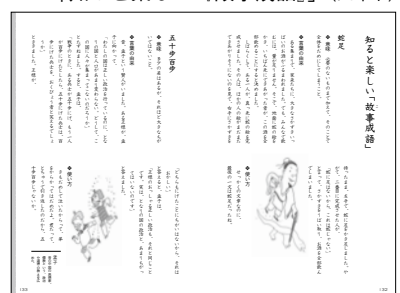
はなが さいた
はなが さいた
ほへふひ ははは
はなが さいて
おくる ひと いな



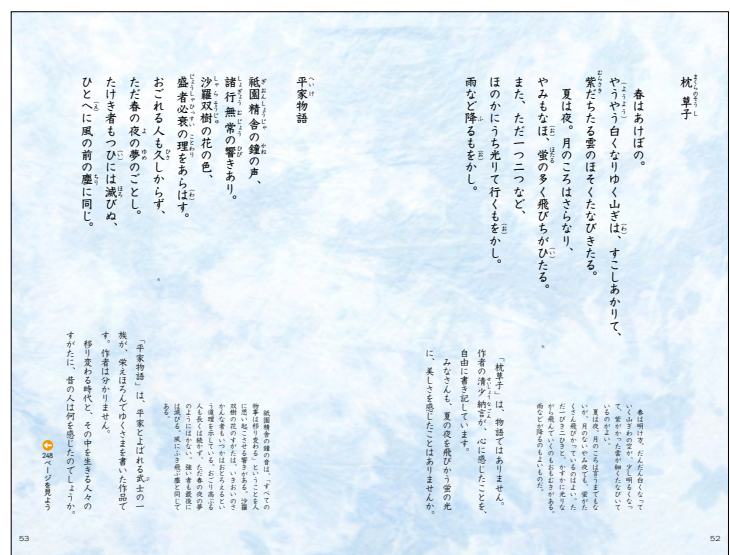
「かるた」(三年下)



「知ると楽しい『故事成語』」(四年下)



「声に出して楽しもう」(五年)



五「かるた」

三年には江橋崇氏による「かるた」の説明文あり。「かるた」の名がポルトガル語に由来するは周知のことなれど、江橋氏はその元なる遊びに「貝おおい」のあることを指摘せり。これは蛤の双身を合はせて組を作る遊びにて、いろはかるた、百人一首の元祖なり。この他にも動物かるた、俳句かるた、わらべ歌かるたなど、枚挙にいと

まなし。とりどりのかるたを集め、教室にて遊び楽しめば、すなはち〈伝統的な言語文化〉の学びになる。富士宮の小学校に勤むる野田和洋氏の実験によれば、百人一首の歌を最も効率的に深く記憶する方法は、かるた取り遊びを繰り返すことに尽く。小学生の暗記力はめざましきものなれば、札をより多く取らんとする動機づけにて多くの詩歌、ことわざを自然と憶えさせること、益多し。かるたは二年「季節の言葉」にも見ゆ。かかる伏線、本教科書にはあまたあり。

六「故事成語」

四年「知ると楽しい『故事成語』」は、長じて日本と中国の文化交流を理解する学習へとつながる。取り上げられし「蛇足」も「五十歩百歩」も、中学・高等学校の国語教科書では漢文として掲載されており、子ども一人に一つずつ故事成語を割り当て、故事の内容・意味・用例をまとめて発表する、故事成語かるたを作り取り合ふ、など遊びをするなど、子どもの語彙を増やす機会はいくらでもあり。故事成語には、もとの意味の転化するものもあり。「助長」は、本来わるき意味なるが、今日では助け伸ばす行為に使ふこと珍しからず。「虎の

威を借る狐」も、機転と才知で危機を乗り切る故事を離れ、力ある者に取り入って虚勢をはる狡猾者をそしる意に使ふ。かかる言葉の意味の変遷も〈伝統的な言語文化〉の側面たり。

七「声に出す古典」

五年「今も昔も」は、『竹取物語』、『枕草子』、『平家物語』の書き出しを、声に出して読む單元なり。この年頃の子どもは、文語調の言ひ回しを存外好む。文意は知らずとも、そらんじて読めればよしとす。日々の隙間なる時間に声に出して読む機会を一年中もつことを志すべし。小学校にありて〈伝統的な言語文化〉の学びは、子どもの声に乗せることが枢要なり。

八「自然を詠む」

五年「季節の言葉」は「春から夏へ、夏の日、秋の空、冬から春へ」の四編よりなる。季節ごとに自然美を描く詩歌を載せてあり。そのうち、いづれの季節にも、地上より空を見上げて詠める句あり。
花冷えに櫻はけづる月夜かな
(春から夏へ)
涼風や青田の上の雲のかけ
(夏の目)

「季節の言葉 ～秋の空～」(五年)



いわし雲大いなる瀬をさかのぼる
(秋の空)
夕焼けてなほそだつたる氷柱かな
(冬から春へ)

これらを比べて「日本の空」を題材に開発單元を組むもよし。子どもらに詞華集を編ませて綴じるもよし。さまざまに工夫すべき可能性を秘めたり。

九「擬声語・擬態語」……

六年「柿山伏」は、狂言なり。狂言は物音すべて言葉にて表すため、擬声語・擬態語の宝庫なり。「柿山伏」にも

こかあ、こかあ、こかあ（カラス）
きやあ、きやあ、きやあ（猿）
ひいよろ、ひいよろ（トビ）
ぼろんぼろ、ぼろんぼろ（呪文）



柿山伏（かきかご）は、狂言の一場面。狂言は物音すべて言葉にて表すため、擬声語・擬態語の宝庫なり。「柿山伏」にも
こかあ、こかあ、こかあ（カラス）
きやあ、きやあ、きやあ（猿）
ひいよろ、ひいよろ（トビ）
ぼろんぼろ、ぼろんぼろ（呪文）

『鳥獣戯画』を読む（六年）

『鳥獣戯画』を読む

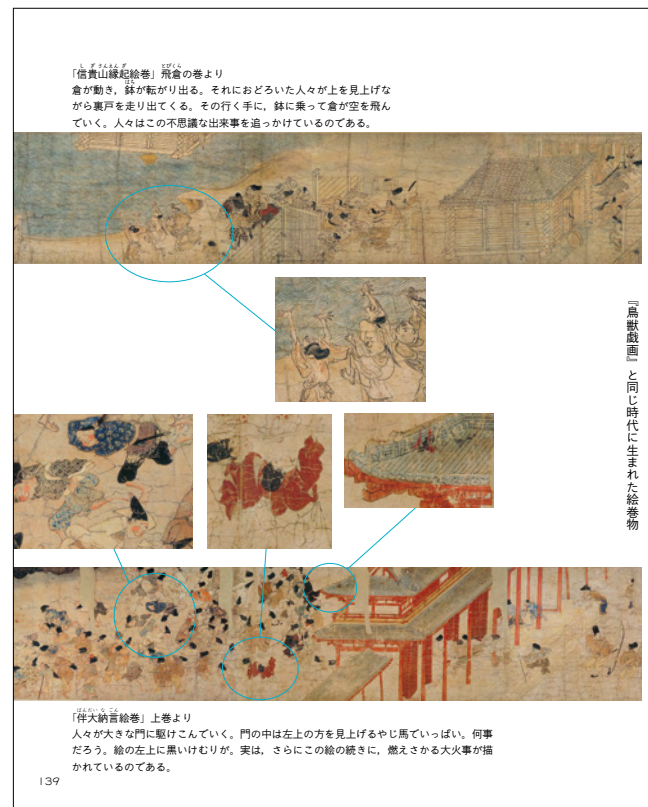
高畑 勲

はつけよい、のこった。秋草の吹き乱れる野で、蛙と兎が相撲をとっている。蛙が外掛け、すかさず兎は足をからめて返し技。その名はなんと、かわず掛け。おっと、蛙が兎の耳をがぶりとかんだ。この反則技に、たまたらず兎は顔をそむけ、ひるんだところを蛙が――
墨一色、抑揚のある線と濃淡だけ、のびのびと見事な筆運び、その気品。みんな生き生きと躍動していて、まるで人間みたいに遊んでいる。けれども、こんなに人間くさいのに、何から何まで本物の生き物のまま。耳の先だけがちゃんと黒いのは、白い冬毛の北国の野ウサギ。いばいばがあって、いく筋か背中が盛り上がっているのはヒキガエル。ただの空想ではなく、ちゃんと動物を観察したうえで、

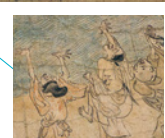


骨格も、手足も、毛並みも、ほぼ正確にしっかりと描いている。だから、この絵を見ると、さっきまで四本足で駆けたり跳びはねたりしていた本当の兎や蛙たちが、今ひよいと立って遊び始めたのだとしか思えない。
この絵は、『鳥獣人物戯画』甲巻、通称『鳥獣戯画』の一場面。『鳥獣戯画』は、『漫画の祖』とも言われる国宝の絵巻物だ。なぜ漫画の祖とよばれるのか、この一場面を見ただけでもわかる。線のみで描かれ、大きさがちがうはずの兎と蛙が相撲をとっている。どこか、おかしくて、おもしろい。すこしく上手だけれど、たしかに漫画みただけ。でも、それだけではない。ために、ぱっとページをめくってごらん。

『鳥獣戯画』と同じ時代に生まれた絵巻物



「信貴山縁起絵巻」飛倉の巻より
倉が動き、鉢が転がり出る。それにおどろいた人々が上を見上げながら裏戸を走り出てくる。その行く手に、鉢に乗って倉が空を飛んでいく。人々はこの不思議な出来事を追っかけているのである。



「伴大納言絵巻」上巻より
人々が大きな門に駆けこんでいく。門の中は左上の方を見上げるやじ馬でいっぱい。何事だろう。絵の左上に黒いけむりが。実は、さらにこの絵の続きに、燃えさがる大火事が描かれているのである。

